

未来貢献学 2020- I [GLI Perception]

2020年03月28日

未来貢献塾 GLI

未来貢献学 I [GLI Perception]の目的

あらゆる世界の事象や学問を古今東西・他分野横断的に観察し、「草の根レベルの生き方改革」を実践するための、より良い世界の捉え方・観方・解釈を提案するものである。そして、これは、随時アップデートされ得る可変的なものであり、誰かに思想・行動を強要・強制するものではない。

1 「真理」とは？～変化の継続こそ不変な存在～

- (1) たった“一つ”の絶対的で普遍的な真理は存在しない。
- (2) 真理とは、「変化し続ける」。
- (3) 時空間が変化し続ける限り、我々が求める真理は「変化し続ける」。
- (4) 総じて、現時点では「変化の継続」が、不変の真理の意味合いに近いものと言える。
- (5) 「不易と流行」ではなく、「遅変化と速変化」のような変化の速度と規模の違いと観る。

2 「変化」とは？～最適化した変化による進化した未来の創造～

- (1) 変化し続けることはすべての前提である。
- (2) 変化する事前事後の比較の目的は、その変化の過程と方向性の分析と見極めのためにある。
- (3) 大きな変化の方向性は最適化を指向しており、「衰退」ではなく「進化」であり、「過去」ではなく「未来」である。
- (4) 変化し続けてきたこの世界は常に「進化」を遂げてきたし、これからも「最適化した変化」として「進化」した未来を創造し続けるだろう。

3 「時空間」とは？～時空間の存在と流れという根本的存在～

- (1) 究極的には細分化できない「今」の連続によって成り立っているのが物理的な時間であり、過去から未来という一定方向へ進み続けている。
- (2) 一定方向への物理的時間軸の変化に連動して物理的な空間の広がりが出てきている。
- (3) “時空間”の存在に、我々が意識している“物理的世界”は規定される。
- (4) 我々が認識している“意識的時間・空間”は、「物理的時間・空間」に束縛されない。
- (5) 宇宙と地球という“物理的時空間”に、人間という“意識的存在”は規定され得る。

4 「世界」とは？～意識的世界の広がりとは変化の継続～

- (1) この“世界”は、我々それぞれが認識することで存在している物理的空間としての世界とはまた次元の異なる“意識的世界”と言える。
- (2) “意識的世界”は、“諸所の技術”を創造し応用されながら、「分断」と「融合」を繰り返し、事象の次元を変えながら包摂的包括的かつ複雑性を増しながら拡大し続けている。

- (3) “意識的世界”は、「物理的世界としての時空間の変化」に基づき、変化し続けている。
- (4) 22世紀は、人間社会内及び外両面の諸課題に乗じて、必然的に物理的・意識的両側面から新たな地球規模コミュニティの創造・構築が求められている。

5 「人間」とは？～世代継承上の存在～

- (1) 人間は、生物学的な“ヒト”から社会的文脈を共有した存在として進化してきた。
- (2) 人間は、“世界”の一部でありかつ進化過程上の存在であり、それ以上でもそれ以下でもない。
- (3) 人間は、確たる定義による線引きは出来ず、“変化の流れ”の中で、その存在を最適化し続ける。
- (4) 人間は、元来不確定性や未規定性、不完全性を強く内包している存在である。
- (5) 人間は、外界からの情報処理と外界への情報発信を担う被触媒的存在であり、固定的・普遍的な人格を有しているのではなく、時機最適な人格を発現している。
- (6) 進化人類学上のホモ・サピエンスである人間は、機械工学・生命科学・情報科学の進展により、身体性の拡張・身体性の変質・意識性の変質に直面しており、より最適化した進化生物学上の未来世代へあらゆることを継承しつつある。
- (7) “自分”や“他者”、社会的関係の明確な線引きや定義の曖昧さを考慮して世界を解釈する必要がある。

6 「社会」とは？～実体のない実態～

- (1) 社会は、進化過程上必然的に発生したコミュニティの最適化した進化形である。
- (2) 社会は、実体のない集合体であるため、時々刻々とその概念・実態を変化させている。
- (3) “社会”というその意識的範囲は科学技術の進展に伴う物理的障壁の突破とともに、拡大し続けている。

7 「歴史・文化・宗教」とは？～ある共有されたストーリー～

- (1) “ある共有されたストーリー”は、学際的に位置づけられると「歴史」と呼ばれ、コミュニティ的に国民国家等を語ると「文化」と呼ばれ、呪術的に神や超越的存在を語ると「宗教」と呼ばれ得る。
- (2) “ある共有されたストーリー”とは、「歴史≡文化≡宗教」であり、「人間社会」と「人間」と「個」におけるそれぞれのアイデンティティを規定し集団形成における統治機能として、進化過程上必要不可欠な“機能的存在”であったと言える。
- (3) “ある共有されたストーリー”とは、真実かどうかは関係なく、ほぼすべては真実ではなさそうである。
- (4) すべての「歴史≡文化≡宗教」は敬われるべき存在であるが、その性質上常に未来を最適化するために更新され続けてきたし、これからも更新され続ける必要があるだろう。
- (5) 歴史上・時間軸において、未来よりは物理的証拠を可視化しやすいために過去を決定的なもとして捉えやすいが、物理的現実存在である生物学的な人間である以上は、過去に対する未規定性を内包していることも留意する必要がある。
- (6) 戦後の日本における意識的な宗教観は“無宗教”認識に近いが、それは意識的な歴史的な文脈上の話である。文化的文脈上及び史実的な歴史的な文脈上では、通史共通する多神教的な日本古来の神道と大陸輸入から最適化した日本式の仏教及び儒教等の東洋哲学が融合し、それらが通底した固有の哲学に規定された“ある共有されたストーリー”（歴史≡文化≡宗教）の文脈上にある“日本文化や国家観”を認識する必要がある。
- (7) 「伝統」・「常識」・「社会通念」は、これらの文脈のより大衆的な一つの言い換えである。

8 「概念」とは？～人為的な意図的な創作物～

- (1) 概念とは、人間である誰かによる“意図された人間による創作物”である。
- (2) 創造された概念により社会的な価値が創造され、それは日々更新され続ける。
- (3) 社会における共通概念（通念、伝統、常識等）は、人間の記憶を基にした伝達を介する曖昧な概念であることを鑑み、かつ時々刻々と変化している前提で俯瞰的・客観的にその実態を捉え続ける必要がある。それは、近視眼的な直近の社会の概念を切り取った“不変・普遍っぽい思い込み”的なものである。
- (4) 概念の更新は進化過程を促進する触媒そのものであり、より高次の概念を共有した存在が生存していく。

9 「科学技術」とは？～社会を根本的に規程する基盤～

- (1) 科学技術がホモ・サピエンスの進化を導いてきた根本的存在だと解釈できる。
- (2) 科学技術は、人間社会と人間が包括してきた「不確定性・未規定性」における「個々の事象の因果関係や可能性を明確にしていく作業」のことである。
- (3) 科学技術の進展は、人間社会や人間をより進化させてきた基盤インフラそのものであり、これからもその進化と発展とともに我々の社会の実態や人間自身を更新し続けるように行動していく必要がある。

1 1 「政治・経済」とは？～

- (1) 政治・経済とは、生物学的存在である“ヒト”が社会的存在として集団形成をするための社会機能のそれぞれ中枢の1つである。
- (2) 政治・経済は、社会形成に必要な機能の1つでしかなく、それらそのものを目的的に語る時には、一機能としての存在が「最上位目的そのもの」として固定観念化されないように注意が必要である。
- (3) 政治は「まつりごと」、経済は「経世済民」であるなど、歴史的・俯瞰的に捉える大局観が必要だろう。

1 1 「教育」とは？～機能としての教育を再興する～

- (1) 教育とは、生物学的存在である“ヒト”から社会的存在である“人間”を生産する社会機能の1つである。
- (2) 教育は、社会形成に必要な社会機能の1つでしかなく、教育そのものを目的的に語る時には、一機能としての教育が「最上位目的そのもの」として固定観念化されないように注意が必要である。
- (3) 教育は社会形成の一機能であるがゆえに、社会の変遷とともにその在り方は更新され続けるものである。
- (4) 教育の目的は“未来の社会形成者の育成”であるがゆえに、その内容は“未来の先取り”を前提にされ、教育者と教育内容と被教育者の“社会的時差”を埋め得る存在になることが最適である。
- (5) 学校は、教育機能を果たす1つの媒体であり、社会状況の中で最適化され続けるその情報伝達媒体の1つであり、決して固定的ではない。

1 2 「日本・日本人」とは？～自己の文脈の本質を見据える～

- (1) 現在の日本という国は、地理・地政学的な特異性によって、固有の文化文脈を中心に発展し続けることが出来た特異的な近代的国民国家・国家観を持っていると言える。
- (2) 日本という国は、それぞれの時代において、外界からの外界的要素を取り込み折衷しながら独自の自己同一性と歴史的な文脈を確立してきた。
- (3) 日本という国家の歴史を俯瞰した時、明治維新と世界大戦敗戦という近代の大きな歴史的転換、現在の世界密着化によって文化的文脈の転換（欧化・米化・地球化）が起きていることを熟慮した上で歴史観を深める必要がある。
- (4) 個人は社会という文脈基盤の上で成り立つ存在であるように、日本という国は地理・地政学的な世界全

体の文脈基盤の上で成り立つ存在であるため、その文脈の変化の中で時々刻々と変化し続けている。

- (5) 時空間の変化に伴う物理的世界の変化に伴って、日本という国民国家・国家観も時々刻々と更新され続けており、その方向は常に一定であると考えられる。
- (6) 近代以前の日本人観として、「多様・両義的・融和的」な特質が伺える。近代（明治維新）以降の日本人の特質としては、「極致性・一局性・一偏性」と言える。

1 3 「人生」とは？～利他に内包される利己の追求～

- (1) 俯瞰的な人生の実態には、生物学的存在としての表現と意識的存在としての表現がある。
- (2) 「生物学的存在としての人生の実態」とは、「母胎内で身体的な存在として認知されてから身体的機能として脳が機能停止を迎えるまでの期間」と言える。
- (3) 「意識的存在としての人生の実態」を表現する上で生じる複雑性は、科学技術の進展に伴い増しているかもしれない。“意識的世界観”が拡大し続け全体が有機的に統合されている中で、「人生」という比較的小規模な客観的指標もより大きな客観的指標に包括され統合されているように見える。しかしながら、意識的に人生に意味付けする自由は未だに主観的存在に依存しており、「利他の追求に内包される利己の追求=全体の利の追求（利全）」は、人生の価値を語る概念の枠組みとして機能していると考えられる。

1 4 「共通の命題と使命」とは？～可能性の拡大の探求～

- (1) 「変化の継続こそ不変の存在」という解釈に寄り添い、出来るだけ俯瞰して物理的世界を鑑みた時に、地球全体規模での「持続可能な社会づくり」が指向されているのは必然性であるように見える。
- (2) 「持続可能な社会」とは、「継続的な改善と更新に駆動される社会」と言え、それは人類全体に課せられた命題と考えられる。そして、それは、「より良きを指向する」ものである。
- (3) 共通命題（Positive Sustainability）を達成するための使命は、「改善可能性（Improvability）+更新可能性（Renewability）+選択多様性（Selectivity）+選択可能性（Accessibility）の拡大」であろう。
- (4) この命題と使命を指向し、利他に内包される利己として未来に貢献する存在が求められている。